

統合がん解析で活発討論

最新診断・治療を報告

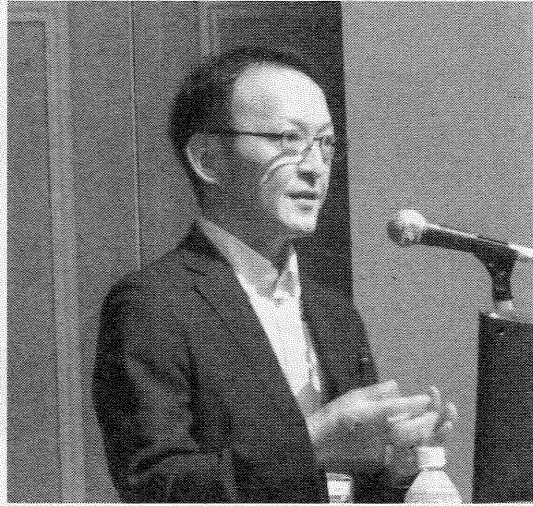
札幌国際シンポ

第38回札幌国際がんシンポジウム(当番世話人・田中伸哉北大腫瘍病理学教室教授)が「統合がん解析」サイエンスが創り出す最新の診断・治療」をテーマに3日間の日程で開かれ、海外などからの招へい研究者23人を含め、がんの研究者や医師など167人が一堂に会し、活発な議論を行った。

近年、次世代シーケンシングの開始。がんに関する新たな研究の成果は治療のための分子標的薬を決定する実臨床に直結するようになっている。2018年度からはがんゲノム医療中核拠点病院等が選定され、パネル検査によるがんゲノム医療が本格的に動き

別講演3題のほか、4つのセッションと特別セッションで、専門家がさまざまな角度から統合がん解析の現況を提示した。「がんの周囲環境とがん幹細胞」と題されたセッションに登場した田中教授は、北大先端生命科学研究所の龔劍萍教授ら

が独自に開発したハイドロゲルによる新規がん幹細胞誘導法(特許出願済み)と、その臨床応用の可能性について、「将来の個別化がん医療とドラッグスクリーニングに大いに期待できる」と報告。このセッションでは、がん細胞の治療抵抗性獲得



当番世話人の田中伸哉教授は、将来の個別化がん医療に向けて、ハイドロゲルによる新規がん幹細胞誘導法の可能性を報告

について討論した。

他のセッションは「がんの最先端サイエンス」「新規がん診断・がん治療」「最先端の病理診断技術」に関する最新研究などについて意見交換し、特別セッションは浅香正博道徳医療大学長らが胃がん根絶に向けた研究・臨床の成果を解説。特別講演は、ゲノム解析やがん幹細胞に関する最新知見が報告された。